

第五章 文芸美術

第一節 文芸

万葉集の恋歌

七世紀中ごろ、大化の改新の大宝律令の制定によって古代律令の国家体制が確立した。その律令制度の地方行政区画である七道の一つ、東海道十四カ国の一国として甲斐国が成立した。

甲斐国は、山梨、八代に巨麻（巨磨）、都留の四郡に分かれ、いまの鳴沢村は都留郡に属していた。地名が文献、または文芸として文字にあらわれてくるのは天平宝字五年（七六二）十二月の『甲斐国司解』が初見である。さらに現在最古の歌集『万葉集』である。

この古代歌集のなかに「鳴沢」の地名を詠じたと思われる古歌がある。『万葉集』第十四巻に集録された「東歌」二百八首のうちの一首である。「東歌」は東海、関東以北を三十一文字の短詩型の歌を収めている。

原文は

佐奴良久波 多麻乃緒婆可里 古布良久波 布自能多可禰乃 奈流佐波能碁登

井上通泰書『万葉集新考第五』（国民図書刊）

これを現代短歌に訳すと

さ寝らくは 玉の緒ばかり 恋ふらくは 富士の高嶺の 鳴澤のごと（如）

これを口語体に訳すと「共に寝た夜は玉の緒ほど短い間なのに、恋しい胸のうちは富士山の高嶺の鳴澤のように高く轟とどろいている」（日本古典文学大系6『万葉集三』）という意味の歌である。

およそ千二百年以上も前に作られた「恋歌」で作者は不明である。当時、活火山であった富士山は、たえず噴煙を上げ、溶岩を噴きあげるすざましい轟音が富士山麓の大地を揺さぶっていたであろう。

富士山の真つ赤に燃える噴火のさまを「恋」の情念にたとえてうたいあげている。

この歌の「鳴澤」は、いまの鳴沢村の地名に由来するという問題は別として「村名」とは深いかかわりのある歌である。

同じく和歌に「鳴澤」を織り込んだ恋歌『東歌』にみえる。

原文は

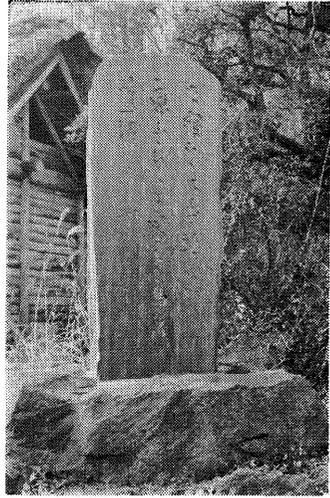
或本歌曰 麻ま可か奈な思し美み 奴わ良ら久く波は思し家け良ら久く 佐さ奈な良ら久く波は 伊い豆ず能の多た可か禰ね能の 奈な流る佐さ波は奈な須す與よ

これを現代短歌に訳すと

或本歌 まがなしみ寝らくはしけらくさならくは伊豆の高嶺の鳴澤なすよ

口語体に訳すと「寝ることは玉の緒のように短く、恋こがれることは伊豆の高嶺の鳴澤のように長くはげしいものである」という意味である。「伊豆能多可禰」とあるように、これは富士山の噴火ではない。三原山か、伊豆山の噴火をさしたのではないだろうか。

前出の「富士の高嶺の鳴澤のごと」について「いまの鳴沢村の地名をさしている」という学説と「活火山だった当



万葉歌碑

時の富士山を総称している枕詞まくらことばである」と地名説を否定する学説に二分されているが、高橋公磨著『万葉集難歌解輪』（日本歌謡芸術協会刊）は、山梨県側の大沢崩れの轟音であると指摘。「伊豆の高嶺の鳴澤なすよ」も、往時に伊豆地方の山が噴火していた痕跡がないことから富士山の東麓の古大沢崩れの轟音ではなかったか、と記述している。いずれにしても万葉集に「鳴澤」の文字が文芸に織り込まれていることは注目に値する。

同村総合センター前庭に万葉集巻十四の東歌「さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと」（渡辺寒鷗揮毫）の歌碑を建てた。

この歌の表題「右の五首駿河国歌」とあるが、鳴沢村は、往古から駿河の富士宮と境を接するため、たびたび国境論争を繰り返していた史実をみても、「甲・駿国境」の地理的な区分は、はっきりしなかったのではないかと、という見方も成り立つ。延喜式の「八代郡」は、いまの南都留郡河口湖町河口、大石、足和田村に及んでいたという解釈でとらえれば納得できよう。

『甲斐叢記・巻之三』（第一書房）の『鳴澤村』の項に「あるいは鳴沙なるさとも言う」とある。富士の白砂がふもとへ流れ落つる音である。

「富士山の西北の方に数千丈の谷あり。砂礫常に流れて其声、雷の轟くが如し。中腹に下りては広き数万歩あり。是を大澤こほと称せりと云う。然らば鳴澤は即ち大澤の事を言なるべし（中略）鳴澤の接近に大田和（鳴澤支村）と呼べる

処あり。古へ大田川と云是なり。かの大澤の地続なるべし。たわとさわは訓音もいと近し。古歌にも鳴澤と詠み、万葉集にも」として、万葉文字の「佐奴良久波…」の歌（詠み人知らず）のほかに、七首の古歌を載せている。

富士山と古歌

鳴沢村は、富士山と一体であるとするならば、富士山を賛美し、富士山をとおして人の世をうつした文芸や絵画の類いをあげれば枚挙にいとまがない。古歌にしても、その多くは駿河、遠江、相模の東海地方から詠じた歌が多い。

駿河は表富士、甲斐は裏富士といわれる通り、表から眺めた富士山のほうが女性的で優美であるからであろう。もう一つの理由は、交通の未開から往古は富士北麓への文人墨客の往来が少なかつたことも挙げられるだろう。『万葉集』の「東歌」に

霞ある富士の山びに我が来なば何方向きてか妹が嘆かむ

この歌も、妹（愛人または妻をいう）を家に残して山麓の山道を登っている作者の立場から詠じている。霞がかかる富士道に来て、四方を眺め、どちらを向いてもすばらしい景観である。家郷に残してきた妹が、この場所に立っていららすごく感動したであろうという意味の歌である。神聖な霊山であった富士山は、女人禁制の聖地であつたと同時に、富士北麓は公路であつたとしても険しすぎで女人を近付けなかつたであろう。

奈良時代初期の歌人高橋虫麻呂の作といわれる古歌が『万葉集』に載っているが、「詠不尽山歌一首並短歌」の長歌の一節に「石花海跡 名付而有毛後山之 堤有海首」と、富士北麓の景観を詠じているとおり、往時は西湖と精進湖が一つにつながっていた大きな湖であつたことを証明している。『万葉集』は、その大きな湖を「石花海」と詠んでいるが、別名「割の海」と書かれている古書もある。

貞観六年（八六四）の富士山の大噴火で、北麓に巨大な溶岩が流れて本栖、剱の海の両湖を埋め、さらに河口湖にも溶岩の火焰が迫り現在の富士五湖を形成した。

西行の富士山詠歌

鎌倉期には、全国行脚した西行法師（一一一八―一一九〇）の富士山詠がある。

風に靡く 富士の煙の空に消えて

行く方も知らぬわが思ひかな

六十九歳の西行は、文治二年（一一八六）、みちのくの旅を終えて、駿河から甲斐へ抜ける精進湖畔の峠で富士山を仰ぎ、そのすばらしさに背中から笈をおろして見とれていううち、笈を忘れて立ち去ったという「笈の峠」伝説が秘められている。西行の歌のとおり、文治年間ころは、富士山の大口から噴煙が立ち込めていたことを立証する歌である。

足利義教の富士山詠

鎌倉期から室町期にいたる南北朝時代、富士山を賛えた詩歌は数少ない。しかし、噴火がおさまった富士山および富士山周辺が、天下の名勝地として脚光を浴びはじめるのは室町期に入ってからである。

永享四年（一四三二）九月、將軍足利義教は、側臣たちの反対を押し切り、富士遊覧の旅をしている。関東の豪族に將軍の權威を誇示するデモンストレーションという見方もあるが、將軍義教は駿河から富士山を眺めて感動し見ずにはいかで思ひ知るべき言の葉も及ばぬ富士とかねて聞きしを

と詠じている。

郷土の英傑武田信玄の「詠百首和歌」（中巨摩郡若草町加賀美 法善寺蔵）のなかに富士山を詠じた歌がないのは残念

だが、応仁の乱（一四六七）に始まる一世紀半にわたる長い戦国争乱の幕を閉じて太平の世が訪れると、一般庶民の間からも文芸運動が勃興してくる。

俳諧の祖といわれた連歌師の山崎宗鑑（没年一五四〇年ごろ）は、足利義晴將軍に仕えた近江の出の士族、本名・志那範重、通称弥三郎、のちに剃髪して宗鑑を号す。著書『新撰大筑波集』は俳諧誕生の転機となった。その宗鑑の句に富士山吟がある。

元朝の見る物にせん富士の山 宗鑑

富士山と江戸文学

関ヶ原の役（一六〇〇）以後、甲斐国は、徳川家康の領土となり、都留郡は、郡内領として谷村に城を構え、家康の重臣・鳥居成次・成行父子（慶長六く寛永九年）を経て、秋元三代（一六三三―一七〇四）の郡内支配が始まる。郡内領一万八千石の小禄大名であったが、藩政が敷かれた時代である。

そのころから民間の山岳信仰が盛んになり、江戸市から富士導者がわんさと富士山頂を目指して訪れるようになった。富士山信仰と結びついて、文学、絵画を通じて「富士山の美」を賛える風潮が高まってきた。

江戸初期に松尾芭蕉（一六四四―九四）の出現で、俳句がにわかに庶民文芸の頂点に立った。元禄期の俳句ブームは、やがて京・大阪に飛び火して全国に広がった。俳句表現による「富士山」も、芭蕉によってひらかれたといつて過言ではない。

雲霧の暫時百景をつくしけり 芭蕉

この句碑は、後世の文化・文政のころ、都留郡河口村（河口湖町河口）の発句はつくの同人たちが河口湖畔の産屋ヶ崎に建てた。

句碑の中央に「芭蕉翁」と大書した文字が芭蕉の直筆と酷似して刻まれ、やや右上に「雲霧乃暫時百景を尽しけり」と刻んでいる。この句は、宝暦六年（一七五六）刊『芭蕉句選拾遺』のなかにある。

「甲州(吉)よし田ノ山家に所持ノ人ありしを、今東武下谷笏志秘蔵なるよし行脚祇法より伝写して出ス」と頭書があり、「土峰讚」の前文の句である。

芭蕉が富士五湖に足を踏み入れた記録は二回。初めて郡内入りしたのは天和三年（一六八三）春である。前年の十二月二十八日、江戸駒近の大円寺から出火した火は折からの強風にあおられて、本郷、下谷、神田、日本橋、浅草、本所、深川をなめ尽くし、江戸八百八町の七分どおりを灰じんにした大火。俗にいう八百屋お七の振袖火事で深川六間堀の芭蕉庵が類焼した。

命だけは危うく助かった芭蕉は、着のみ着のまま甲州・初狩村（大月市初狩町）の弟子（杉山杉風）の姉の家に身を寄せるが、数日後に同じく弟子の、高山麿塘、谷村城主秋元喬朝(なかともし)の国家老・高山伝右衛門繁文(しげふみ)（一六四九—一七一八）に招かれて谷村の高山邸に約五十日間逗留した。

二回目は、貞享二年（一六八五）四月初旬、甲子吟行の帰り、谷村の高山邸に立ち寄り二—三日逗留した。帰りは河口湖畔の舟津、小立を経て鳴沢村を通り、朝霧高原を通って富士宮に出て、尾張(ななみ)（愛知県）の鳴海(なるみ)に逗留、四月十日出立して江戸に帰庵している。芭蕉の「空水宛書簡」などでも明らかである。

芭蕉が高山麿塘の案内で富士五湖周辺を見物したのは第一回の天和三年の初頭から五月初旬にかけてであろう。

日を額(がく)にうつ富士の棟上(むね)げ 芭蕉

『校本芭蕉全集・連句篇上』（岩波書店刊）の一句だが、富士山を間近に見て、帰庵して作句したものらしい。句のなかに、

富士の風や扇にのせて江戸土産 芭蕉

という洒脱な句がある。芭蕉の高山麿時（たまり）の句に

年の花富士はつぼめるすがたかな 麿時

富士山を題材にしたこの句は雪をかぶった富士山を年頭の花のつぼみにたとえているあたり俳人・麿時の面目躍如たるしたたかさが感じられる。

このほか芭蕉門下の宝井其角、江戸中期の上矢敵水（てきみづ）、辻嵐外、信州の俳人小林一茶、幕末の幕臣山岡鉄舟など著名な俳人が富士山を題材にした句を多く残している。

加茂季鷹の『富士日記』

京都の上賀茂神社の神官で国学者の加茂季鷹は歌人としても著名であった。寛政二年（一七九〇）七月十八日、江戸をたつた季鷹は吉田の浅間神社の神官、刑部国仲（おさかくになか）の案内で富士山に登った。

帰途、河口、御坂を経て甲府に至り、島田式穀らの案内で、酒折宮、差出の磯など、歌枕や旧跡を訪ね、八月十二日江戸へ帰省した。その間に書きとめた日記が『富士日記』である。文章も優雅で、富士山周辺にちなんだ和歌も趣きが深い。（天保十三年没、享年九十歳）

日のもとの やまとの国のしづめとも なるてふ山を けふみつるかも

ふじの根に ふりさけ見れば青海原 豊さかのぼる天の日影

雲よりも、高く見えたるふじのねの月にへだたる かげやなからむ

江戸期の鳴沢文芸

富士山の民間信仰が盛んになった江戸初期から中期にかけて、辺村の富士北ろく地方にも多種多様の江戸文化が浸

透してきた。

江戸の庶民のなかに定着した芭蕉を元祖とする俳句活動が富士北ろくの村々にも波及しはじめたのは寛政年間（一七八九—一八〇〇）といわれている。

溶岩流におおわれた立地条件のきびしい鳴沢村の村民は衣・食・住に窮迫していて、詩歌を作る心の余裕などまったくなかったところである。鳴沢村の村民の間で発句はつくといわれる句会が開かれるようになったのは、これからさらに二十年ほど経た文政年間（一八一八—二九）である。

村の古文書のなかから俳句集を探し出すのは容易ではなかったが、村役場の三浦忍企画課長の協力で、鳴沢村鳴沢の渡辺泰一氏所蔵の古文書の中から和紙一枚に書かれた十句の俳句が発見された。

江戸末期の作品であることは、他の古文書から容易にくみとれるが、いつ、どんな句会に投句した俳句なのか、不明である。

なお、各俳句の右上に、不揃いな日付が記入されているが、その意味も不明であるが、多分、作句した日の日付であろうか。原文のまま次に掲載する。

五日

若草や氷のゆるむ水の音

三日

朝見れば沢辺煙りや別れ霜

三日

寝さめても又寝安きや春の雨

七日

夕焼けを梢に持ちしももの花

酒の香の残りし道や笑ふ山

五日

空高く声の雲りぬひばりかな

三日

きじ鳴くや右も左も小松原

ころなき鼻毛ぬく日や春の行ゆく

下刈りや初音ゆかしき藪の中

ナルサワ
寿亭様

五日

山陰の里を知らずや鳳の中

御催主様

鳴沢村の寿亭という俳号の人が、句会に投句する近作十句を宗匠に提出した句集であろう。二枚書いて一枚は手もとに残していたものらしい。古文書の所有者・渡辺泰一氏の祖先の作とみられる。

このころの句会は、会員が一堂に会して作句するという形式ではなく、さきに近作何句かを宗匠のもとに送って置いて、宗匠の選の句評会が開かれていたと推定される。

江戸中期以降に街道筋の村々には、俳句、短歌の宗匠といわれる人が多くいた。往時は俳句とは言わず「発句はっく」と呼んでいた。

文芸の変遷をたどると、関東甲信越の場合でも街道沿いが文化圏のルートである。江戸を中心にして甲州街道、富士山道は江戸から近いという立地条件が加わって比較的早い速度で江戸文化の流れが富士北ろくに浸透したと予想されるが、辺地の鳴沢村に到達するには、そこからさらに長い時間を費やしたようだ。

中道往還と御坂路、それに富士山道にはさまれた鳴沢村は、交通の便が悪かったことも原因となつて、文化の面でも遅れがちであつたことは確かである。しかし、幕末ごろには、宗匠といわれる人たちが数人いて「読み書きそろばん」は無論のこと、発句や漢詩、短歌などの手ほどきをしていた。

宗匠は大概、宮司、僧侶といった学識者。または、読み書きそろばんに卓越した名主階級の人たちであつた。

明治の富士山文芸

幕末から明治への激動期の鳴沢村の村民は、氣息えんえんの暮らしを続け、世事にうとく、文芸などとは全く無縁な暮らしをしていた。

明治二十七、八年の日清戦争のころから村の周辺もあわただしくなつて、戦争景氣の余波で暮らし向きもやや上向いてきた。

吉田、船津、小立、勝山、大嵐のルートで文明が浸透しはじめて明治三十年代にはいつて近村との文化交流のなかで俳句活動が台頭してきた。

現在、大田和の渡辺和一郎氏方に所蔵されている麻地の白布（長さ三反、幅五十疋）に筆字で書かれた連句は、明治三十五年九月十七日、同区の山神社祭典の祝句として本殿に奉納した布製の連句掛けである。選者は和気庵宗匠である。「秋季乱題」の季題で次の句が書かれている。

秋季乱題

山神祭読込

和気庵宗匠撰

〇七印

秋もたつ山の姿や神祭り	カッ山	五風	祭られん塚苔むして露しぐれ	大嵐	弧山
虫送り里の烟りや山に這ふ	同	同	勲章は位牌にかけて魂祭り	同	同
月に名能ふ高山社や山の神	カッ山	花月	山の名はつい忘れたり鹿の声	同	同
先に出た稲穂供へて山の神	カッ山	磯山	似た人のありておかしき案山子かな	同	同
			新米の豊かも見へて祭りかな	大田和	夢世
			見返へせば日に／＼高し秋の山	カッ山	秀月
			豊年の初穂納めて祭りかな	大田和	丹頂
			神前に捧げし稲や我手作	大田和	鳥鳴

稲妻のしらば見せんに神の森 カツ山 静里
 神森にしらじら秋の螢かな 大田和 金烏
 深山に出してあつさや唐辛 同 同
 掛稲はまだ初穂らし神社 かみせら 同 同
 ○十印

海山の秋あさく見て祭りかな カツ山 秀月
 祭る灯の細る時分や鹿の声 大田和 丹頂
 山を雲はなれて速し秋の空 カツ山 秀月
 名月に願ひし空や秋祭り 大田和 竹林
 ○三光

山里や跡はあしくも初菌 はつきあこ 乳ヶ崎 丹月
 御嘉例の手打ちのそばや秋祭り 迷人
 山の神祭りて秋の別れかな カツ山 五風
 まざまざと尽す手向けや魂祭り たま 大風 弧山
 祭らるる魂の招きか糸すすき 同 同
 山神の森に見そめて龍田姫 同 同

玉綴るみくさの露や穂屋祭り 大田和 金烏
 八束穂を掛けて祭例の稲の秋 大風 弧山
 灯も秋の花なり山の神祭り ひ カツ山 湖水
 ○軸

稲塚の高さ競べん富士の山 作者不明
 明治壬寅仲秋十七日
 (三十五年九月)

俳諧の聖地・大田和

山神社の布地の奉納俳句集をみても大田和は、江戸末期から俳諧のメッカだったことがわかる。吉田―船津の文化圏に接近しているという立地条件と比較的肥沃の土地に恵まれているという経済状況の恩恵もあって文芸に心を寄せ、風潮が鳴沢地区に比べて高かったことも事実である。

明治末期から大正・昭和の初期にかけて俳句を中心とする文芸活動に加わっていた文人墨客が多くいた。発句の宗

匠といわれる人も何人かいた。さきの和気庵宗匠もその一人だが、毎年秋に行われる八幡社の祭典に出品する猷燈句集に村外を含めて二十人内外の投句者がいた。上位入賞をねらって覇を競い合っていた。

明治の富士山文芸

明治・大正・昭和の三代にわたる全国の文芸の王座を占めていたのは短詩型文学である。

漢詩、短歌、俳句、川柳の分野には、富士山を題材にした作品は数限りなくある。富国強兵、殖産興業を目指す明治初期の文明開化のころは、士気を鼓舞する題材として富士山が利用された。

明治維新から生まれた政治家、軍人で知名度も高い勝海舟、西郷隆盛、伊藤博文、乃木希典（まればか）らは富士山を礼賛した漢詩を残している。

詩人北村透谷

現代詩の先人的な役割を果たした当時十八歳の北村透谷は、明治十八年七月下旬、単身で富士登山をした記録を『富士山遊びの記憶』（北村透谷全集）と題してまとめている。

透谷の富士山紀行は、東京から徒歩で八王子、小仏峠、上野原、大月、谷村経由で吉田口から山頂をきわめている。七月二十六日か七日の早朝、上吉田の羽田穂並（はな）の宿を出て、北口本宮富士浅間神社の大鳥居をくぐって馬返しに出た。透谷をはじめ有名無名にかかわらず、明治期に入ると、交通の発達に伴い、東西から多くの文人たちが富士北ろく地方を訪れるようになった。著名な作家、歌人、俳人、画家なども麗峰富士に題材を求めて訪れている。明治から大正にかけて、富士山を題材にした文人を幾人か取り上げてみよう。

徳富蘆花

明治の文豪の一人・徳富蘆花（一八六八—一九二七）が初めて富士山ろくを訪れたのは明治三十一年一月である。

このとき、「此頃の富士の曙」^{あけぼの}「富士の倒影」「富士雪を帯ぶ」の三つの随筆を書いている。いずれも伊豆から眺めた冬富士の美しさと壮嚴なおもいをそのまま描写している。

特に「此頃の富士の曙」の描写は、富士山を真下からみている鳴沢村の村民にも、感動的な共感を与える文章である。

富士山を賛歌した俳人・歌人

明治三十六年六月、新宿―甲府間の中央線が開通した。やがて松本、名古屋を結ぶ中央線の全面開通と共に、辺地といわれた富士北ろく地方にも著名な歌人や俳人たちが大月、富士宮、御殿場経由で馬車、または強しんな足で来遊するようになり富士の賛歌を数多く残している。

伊藤左千夫、正岡子規、高浜虚子、佐々木信綱、島木赤彦、若山牧水、北原白秋、依田秋圃、吉井勇、窪田空穂、古泉千櫻^{ちりび}、与謝野晶子、斎藤茂吉、前田夕暮、土屋文明らも明治末期から昭和初年にかけて富士北ろくを歩いて作歌している。

俳人では、高浜虚子（一八七四―一九五九）、富安風生（一八八五―一九七六）は、山中湖畔の別荘に住まいしていたことから岳ろくの俳人たちとの交流が深く、同人、門下生の数が多かった。

鳴沢村とは、御坂の山一つ隔てた境川村の山廬で生涯をすごした飯田蛇笏（一八八五―一九六二）は、同じ甲州人である。俳誌『雲母』創刊以来、鳴沢村民のなかで同誌に投句した人も少なくない。

蛇笏自身、生涯を通じて富士山の句を吟じてやまなかつた。『飯田蛇笏全句集』（角川書店刊）の明治四十年の「冬」の句の

汝くみにきて遠富士にちどりかな 蛇笏

が初見の句である。蛇笏は昭和三十七年九月三日、七十七歳で没するまで、折にふれて富士を題材にして作句しているが、そのなかから二句紹介する。

雪解富士戸々の賤機こだませり

阿難越え春行く富士を仰ぎけり

戦前・戦中の文芸活動

大正期は、近代文芸の躍動期であった。

中央文壇では、自然主義文学や耽美派文学が主流を成していたが、その反動とも言うべき大衆文学が台頭し、菊池寛、直木三十五、長谷川伸、中里介山などが登場、新聞小説、大衆雑誌などを通じて町から村へ浸透していった。

同じく労働争議、小作騒動の導火線となった吉野作造の大正デモクラシーの人間尊重と疲弊した農民、中・下層階級の間にはじめたプロレタリア文学も、束の間ではあったが、表現の自由を許された大正から昭和初期は、文芸復興の好機となった。

しかし、大正十二年九月一日の関東大震災に次いで昭和四年の世界の大恐慌の旋風にまき込まれた日本は、追いつめられた苦境をアジア大陸に求めてきた臭い戦争への序奏が始まり、昭和六年の満州事変を境に軍国主義の道を歩み始めた。

自由を謳歌した文芸活動も、言論統制がきびくなる一方で忠君愛国を賛える文芸が台頭した。

鳴沢村の農民の暮らしは、相変わらず貧窮していた。恵まれない環境のなかで戦争の不安におののいていた。

昭和十二年七月七日の日中戦争の勃発と同時に、村の若者たちにも召集令状が届けられた。出征兵士を送る歌声が村中に響きわたり、一人また一人と奉公袋をさげた若者たちが村を去っていった。

銃後を守る村内も戦時一色に塗りつぶされたのは昭和十六年十二月八日の太平洋戦争に突入してからである。明治以来、鳴沢、大田和の秋祭りに俳句の連掛け大会を続けてきたが、これらの献燈句のなかにも「皇国」とか「み魂」^{たま}「大君のため…」といった句が随所に扱われてきた。

その献燈句会も戦争が激烈化してきた昭和十八年以降から終戦の年の二十年秋まで中断せざるを得なかった。

大田和の渡辺和一郎氏が所蔵している昭和十五年度の『大田和八幡社献燈句集』は、戦時中の文芸活動を裏付ける貴重な資料である。この句集の一部を割愛して次に掲載する。

題「秋季」 大田和催主

八幡社献燈句集

秋鹿や紅葉ふみ分け泣きにけり	ムラ		
十九		色ついて間もなく落ちる紅葉かな	同
秋の夜や月に色添う紅葉かな	同	秋の日や茶呑み話も菊ばなし	同
此所までも届きそうなる稲の波	同	秋の夜や音たのしみに添ふ虫の声	同
黄梅を見える向ふの粟畑	同	◎茸狩りや互にのぞく籠の内	フナツ
松島に只一本の紅葉かな	同	山里や草屋の裏は柿もみじ	みさを
秋の雨墓地のあんどん流しけり	同	名月や浮世の外を海と山	同
夕日さす山は錦の紅葉かな	同	なかあけて見たき桔梗のつぼみかな	同

湖南庵勝村宗匠評

萩のまど絵筆とる人美しき

泣月 ムラ

唐きびの葉をする音や秋の暮れ

同

萩咲きて小鹿の瞳美しき

同

暁の雲流れゆく今朝の秋

同

月落ちて世は虫の音の満ちにけり

同

◎ 絵のような家ある菊の在所かな

ムラ 一二三

豊年の太鼓とどろく山田かな

同

◎ 秋の川橋長くして夕日落つ

ムラ 周月

不二山を近く見せにけり秋の雲

柳枝 ムラ

◎ 稻妻やひと足戻る丸木橋

ムラ フナツ

人形の案山子も主の忠義かな

同

◎ 閉山の式に一行時雨けり

ムラ 文星

◎ 忠と義のつづく案山子の力かな

同

はでやかな夕暮れ作る紅葉かな

ムラ 朝日

◎ 風鈴も静かに鳴りぬ虫の声

同

紅葉山はなればなれに暮れにけり

ムラ 秋月

人足の音にもなれて虫の声

同

秋の山鳥を吠ゆける小犬かな

ムラ 足和田

◎ 山畑の案山子ひとつに日の暮るゝ

同

勝村盲評

田の神になれて立てる案山子かな

同

(◎特選◎秀句○佳作)

ふじ見ゆる方へ植へけり菊の花

同

『五湖文化』創刊

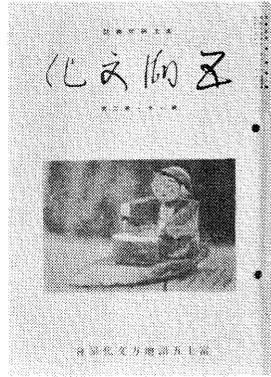
昭和十五年九月、河口村出身の作家中村星湖を主宰とする郷土研究雑誌『五湖文化』が創刊された。

富士北ろくの全町村にまたがる郷土の総合誌として脚光を浴びたが、回を重ねること七冊目で廃刊となった。

第二号から七号までの六冊分は、富士吉田市文化協会（内藤成雄会長）の提言で昭和五十九年十一月に複製された。

A5判七十ページ内外の本印刷の総合誌は、内容も学究的で歴史、民俗、自然科学、文芸などの資料価値も高い。

鳴沢村から発行元の富士五湖地方文化協会に参加した会員は、鳴沢郵便局長で自然科学を研究する小林高德。鳴沢



『五湖文化』の表紙

村外四ヶ村恩賜県有財産保護組合長の小佐野肇、賛助員として林義雄（鳴沢小校長）渡辺匡知（鳴沢氷穴）渡辺宇一郎（村社宮司）渡辺民之助（信用組合長）梶原昇平（村長）倉沢茂（大田和小校長）である。同誌に執筆しているのは小林高德ただ一人で同誌二号に隨筆、三号に「小御岳の植物」を寄稿している。

俳句月刊『足和田』創刊

指導で第一回山梨県芸術祭が開かれた。

短文芸（俳句・短歌・詩・川柳）、演劇（島崎藤村作・竹内勇太郎脚色・演出『破戒』）、美術（洋画・日本画）など県民芸術の開催が始まった年である。

そのころ、富士北ろくの西湖を囲む各村の青年層の間で俳句の復活運動が始まった。

鳴沢村大田和、隣村の大嵐村、小立村、根場村などに住む俳句愛好の青年約三十人が参加して俳句の月刊誌と『足和田』を創刊した。昭和二十三年九月二十日である。

俳句雑誌といってもがり版刷りのB5判四ページないし六ページの小冊である。

勝山村の富士ビューホテルは、米軍に接収されていて、米軍の高級将校や家族が入居していた。敗戦の後遺症が住民一人ひとりに重くのしかかっていた食糧難、就職難の混乱期である。

会員の多くは、悲惨な戦争を体験した青年たちである。お先真っ暗な占領下にあって、戦前、父や祖父たちの間で盛んだった俳句、短歌の復活を願い、共通の趣味をもつ近村の青年たちと手を結んで月刊の俳句雑誌を発行すること

になったのである。

回を重ねるたびに会員数もふえた。創刊当時の俳誌の主筆は渡辺静旭（大嵐村）。選者は同じ地区の誘泉堂沼塔（大田和）である。

鳴沢地区の文芸活動 月刊『若富士』発行

昭和二十年後半から青少年層の都会志向が高まり、二、三男の中卒、高卒の若者たちは村を去って京浜地方に就職した。

若者たちが去った村は、壮年に老人層が農耕の主役になり、高原野菜、温室栽培にすべてを傾注した。日本全土が経済成長期の渦の中に巻き込まれたかたちだった。

鳴沢村の青年層から巻き起こった文芸活動は青年団活動の中に織り込まれたものの、青年団員の数が三十年代に入ると、著しく減少して青年団活動そのものが宙に浮いてしまう結末を迎えた。

文芸不毛の村内にあつて中年層の渡辺頼平、渡辺千春、渡辺富蔵、渡辺武頼、渡辺金時、小林猿加枝、渡辺富明、渡辺頼恵といった青年団時代から短歌、俳句、詩を勉強する人たちが糾合して「万葉集研究講座」や月刊誌『若富士』（がり版刷り）を発行して農事のかたわら心のやすらぎを求めている。

渡辺富明、渡辺頼恵合作の「青訓の歌」も、これも文芸活動のなから生まれた所産であつたが、昭和二十年代で自然に消滅してしまった。

演劇活動

昭和二十三年から同二十五年にかけて鳴沢地区に劇団があつた。

三浦金重を座長とする青年層で組織するアマチュア劇団で地区の人たちは「三浦金重劇団」と呼んでいた。

鳴沢小の講堂を舞台に仕立てて、おもに人情ものの時代劇や現代劇を上演した。時には近村から頼まれて精進、本栖、大嵐などへ出向いて上演したこともある。脚本は梶原辰衛、なかでも人気を集めた出し物は「煙草屋喜八」「狐塚」「勘助権太の旅」などであった。

梶原辰衛は、これを契機にシナリオ作家になる志を立てて上京、『独眼竜政宗』の作者・ジェームス・三木らと机を並べて本格的なシナリオの勉強をした時期があつた。今も農業をしながらその夢を捨てず、脚本を書き続けている。

書道熱が高い鳴沢地区

鳴沢村全体が書道熱が高い。特に鳴沢地区には、書道の大家といわれる人が多い、近代では尾崎翠堂に傾倒していた小林武正（戦死）、渡辺頼恵（故人・翳山）など卓越した技量を持つ書道人であつた。今も山梨日日新聞社主催の初春の席書き大会などで入賞する小・中学生が多い。

青・中年層では書真会の渡辺寒鷗に師事している人も少なくない。

最近の文芸活動

昭和五十一年、鳴沢村文化協会が発足して毎年一月に文化祭が行われているが、そのなかの短歌、俳句部門に出品する人の数がふえている。

昭和三十年代から四十年代の文芸空白の時代を過ぎて、都留市の中大路千代子主宰の短歌誌『須曾乃』や堤併一佳主宰の『裸子』に投稿する人たちもあらわれている。

『須曾乃』には、渡辺馨、渡辺国孝、梶原まさ子、渡辺早苗、渡辺洋子、渡辺和子といった中・高齢の婦人層の加入が目立ち、最近では、昭和二十五年生まれの小林輝美が入会した。

月例の短歌誌に十首寄稿しているほか、村の文化祭への出品、その他の会にも寄稿している。短歌『美知思波』の

会員で現村長の小林美知をリーダーとする短歌教室、俳句教室に受講したのが短芸芸に入った動機のようなのだが、村教委の生涯教育、成人教室の一環として文芸の指導に主力を注ぎ始めてから村内の俳句人口、短歌人口が増えてきたといえるが、ほかの部門に比べるとまだまだ部員は少ないようだ。

文芸作品の舞台となった鳴沢村

松本清張著『波の塔』第二次大戦後、日本および日本人は、主権在民の平和国家が保障された。文芸もまた、検閲の暗いイメージが排除されて、思想の自由、表現の自由を獲得した。

検閲解禁は、また新たな波紋をまき起こした。昭和二十五年六月、D・H・ロレンス原作『チャタレー夫人の恋人』が、刑法一七五条容疑で押収された事件も、その一例である。戦後の姦通罪廃止に伴い、人妻の不倫を題材にした小説が氾濫した。

人間を描く文芸作品には、性描写も不可欠な存在である。その質が問われていた昭和三十四年の五月二十九日付の週刊誌『女性自身』に推理作家の松本清張著『波の塔』が連載された。この小説は翌年六月十五日付で完結した。妻と夫の不倫をテーマにしている。

人妻と知らないで恋愛した若い検事、人妻の夫は、政治の情報ブローカーで妻以外に愛人がいる。夫は警察にあげられ、取り調べを担当したのが妻の愛人の検事。夫は妻との情事をあばいて検事を失脚させ、妻を死に追いやるというストーリーである。

ラストに人妻が死に場所を求めて青木ヶ原の樹海を訪れる。この作品が映画化され、話題になって以来、青木ヶ原の自殺者が激増した。

今も、その風潮は消えず自殺の名所(?)となっている。男女の性別・年齢を問わず、青木ヶ原に死に場所を求め

て来る自殺志願者の数は多い。そのラストの背景が鳴沢村である。

大岡昇平と武田泰淳

昭和四十一年五月、鳴沢村小字富士山の富士桜高原別荘村に作家の大岡昇平（一九〇九〜）が山荘を建てた。夏の間は、長男の設計で建てた木造のヒュッテ風な山荘で執筆を続けている。

今は亡き作家の武田泰淳（一九二二〜七六）も、同じ別荘村に昭和三十八年十二月初め、山荘を建てて、村の住人となった。大岡氏は、東京都出身。京大仏文科を出て、スタンダールの研究と翻訳をしていたが、戦争中、応召され比島戦線へ。戦後、捕虜となった体験をもとに『俘虜記』を発表、昭和二十三年、横光賞を受賞した。以来、作家活動に入り、西歐風な構成と文体で『武蔵野夫人』『野火』『花影』など数多くの秀作を発表した。

特に四十二年一月号の月刊『中央公論』に連載した『レイテ戦記』は大きな反響を呼んだ。

武田百合子

武田泰淳の鳴沢の山荘を「寸心亭」とつけた。「文章千古の事、得夫、寸心知る」という詩句が好きで、泰淳自身で名付けたというが、別名、百合子夫人の名前を借りて「百合花亭」とも呼んだことを武田百合子の『富士日記』（上・中公文庫刊）の冒頭に書いている。泰淳は東京都出身。東大文学科を中退、評伝『司馬遷』を発表して昭和十九年、中国に渡り、上海で終戦を迎えた。その体験を小説化した『蝮のすえ』で文壇に登場、人間のたくましさを描いた戦後の代表的な作家として脚光を浴びた。

泰淳は、昭和五十一年十月五日、胃ガンで六十四歳の生涯を終えるが、泰淳と富士桜高原の別荘村で十三年間すごした百合子未亡人は月刊『海』に『富士日記』を連載、天衣無縫な文体で夫婦愛の日々をつづった記録は昭和五十二年度田村俊子賞を受賞した。

武田百合子の『富士日記』は、鳴沢村が舞台である。随所に鳴沢村での出来事が克明に記録されている。ある時は誇らしげに、ある時は批判を加えながら優しい主婦の目で地元の風景を温かくとらえている。

西川勢津子

家事評論家の西川勢津子が鳴沢村小字富士山の富士桜高原別荘村に入居したのは昭和四十年五月である。通算すると二十年も村民税を払い、この村に住んでいることになる。

東京都出身。日本女子大卒。家事評論家として戦後の暮らしの革命に貢献した著名人である。著書も多い。最近出版された本だけを拾っても『勢津子おばさんの洗濯便利帳』『おばさんの知恵袋』『お遊びクッキング』『私の嫁いびり』『生活便利帳』『お肌の曲り角からUターン』（集英社刊）『女の知恵袋』など。これらの新刊書は、必ず鳴沢村総合センターの図書室に寄贈している。

別荘村の住人と村民との間の交流は、途絶えがちである。村内で生活必需品を売っている商店の家族とは「商品販売」を通じてお付き合いしている程度である。別荘村には、こうした文筆家のほかに山本富士子・文晴夫妻など芸能関係の住人も少なくない。

村教委では、村の文化活動を高める上で、こうした別荘村に住んでいる著名な人たちとの交流を深めたいと、新しい構想の文化活動を計画しているようである。

井伏鱒二

井伏鱒二の『岳麓点描』が昭和六十一年四月二十日発刊された。

この作品は、月刊『海』に昭和五十四年一月号から翌年一月号まで一年間にわたって連載した『新倉掘貫』あらくらほりぬきなど数編の富士北ろく地方の近世・近代の物語を一冊にまとめて発刊した。

この作品の中にも、鳴沢村周辺の青木ケ原樹海や街道筋の風物が克明に、しかも実証的に書かれている。作者と甲州とは、六十有余年の長いお付き合いになる。それだけに風俗、地理、方言、歴史考証は確かである。

第二節 美術・工芸

江戸末期からの美術品

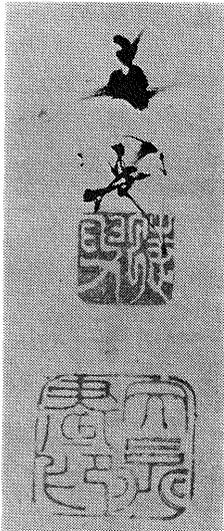
鳴沢村には、室町以前の書画・工芸品は見当たらない。ほとんどが江戸末期から明治以降に集中している。

『河口湖町史』（河口湖町刊）によると、隣接の船津村、小立村あたりまでは江戸中期に紀州家の画僧・波羅蜜、江戸の芝光明寺の二男で画僧の雲室らが来遊して、船津の井出本家、妙法寺の奥院などの襖絵を描いている。

こうした文人墨客が富士みち、御坂路、中道往還の中間地帯にある鳴沢を往来しただけで村に滞在して絵画や工芸



文晁の河童画



文晁の落款

品を残していったという記録も作品も極めて少ない。

宮沢氷堂の「千匹馬」

鳴沢地区の臨濟宗妙心寺派の通玄寺（伊賀上明教住職）で所蔵する谷文晁（一七六三—一八四一）の掛け軸と同寺の観音堂内に掲げてある絵師・宮沢氷堂（一八〇九—一八三）作の「千匹馬」の献額にしても近代の作品である。氷堂（本名・栄吉）は、西八代郡六郷町鴨狩の出身。明治二十二年作の「千匹馬」の画面は、縦〇・七呎、横幅一四・八呎。板に布を張り、極彩色を施した駿馬の百相千態を描いている。

大田和の八幡社阿弥陀堂内の天井に書かれている彩色の「三十六歌仙」。同じく大田和の渡辺和一郎氏宅と渡辺善四郎宅の襖絵にしても明治以降の作品である。

谷文晁の「河童画」

通玄寺に所蔵されている谷文晁の掛け軸（九十呎×一呎八十呎）の河童の水墨画である。入手経路ははっきりしていないが、明治初年に寄進されたといわれている。

『広辞苑』によると、文晁は江戸後期の江戸の画家。別号を写山楼、無二庵主などといい、白川楽翁の遇を受けた。『集古十種』のさし絵や『石山寺縁起』の増補を描いている。南画に北画風を加え、また大和絵の手法を取り入れている。のちに洋画の手法をも学んだという多彩な画風をもつ画家である。晩年、諸国を巡歴して写生的な風景画を遺している。それに肖像画にもすぐれた作品を残している。

文晁の河童の絵は有名である。この寺にある南画風な河童の絵は、ユーモラスで人間臭い。このほかに文晁画と伝えられる「虎」の水墨画一軸が所蔵されている。

大田和の「三十六歌仙」

大田和の八幡神社の阿弥陀堂の二間三間の天井板に描かれている「三十六歌仙」(極彩色)は、気品にあふれ、色彩、構図とも一流の絵師の手による制作として高く評価されている。

神仏混交の名残をとどめている同八幡社の阿弥陀堂は、文政八年(一八二五)、境内の裏山から現在地に移築造営したと社記にあり、その後の天井板張り替えのさい、氏子総代の発願で「三十六歌仙」の絵と和歌を泥絵具と墨で描いたものである。



阿弥陀堂の三十六歌仙天井絵

「三十六歌仙」は、平安末期ごろ、代表的な歌人三十六人を選んで藤原公任撰の「三十六人撰」の歌集を作成した。そのなかには柿本人麻呂、紀貫之(きのつらゆき)、山部赤人、小野小町、在原業平(なりひら)、大伴家持(おとものやかもち)、素性法師など歴史上著名な人物

美和神社(御坂町)にが名を連ねている。室町期、武田信玄も窪八幡神社(山梨市)や二之宮の「三十六歌仙」(各一枚額)を寄進し、武運長久を祈願している。

この絵をだれがかいたか、天井裏の棟札でも調べてみなければわからないが、大田和の郷土史研究家の渡辺耆男氏は「絵師は地元の人ではないか」と言っている。明治四年当時の記録に「幸左衛門」と「幸右衛門」という二人が描いたとある。それも確実な記録ではない。「三十六歌仙」を描くに当たって、この二人が深くかわっていたことは確かなようだ。絵師については今後の課題で、新しい資料の発見に期待されている。

現代美術

村にいて油絵を専攻しているのは鳴沢村立保育所長の小林輝美ただ一

人。昭和四十五年三月、吉田高校卒業後、在校中美術部の顧問だった岡部祐造教諭をリーダーとする美術サークルに参加して画業に努め、同四十六年十一月、県主催の第十六回勤労者美術展に油彩「秋」(F50号)を出品して、県経営者協会長賞を受賞した。以来、毎年、県展に勤労者美術展。村の文化祭などに出品、数回入賞している。四十七年十月、東京で開かれた全国青年大会美術展では「花」(30号)が奨励賞に選ばれた。その持技を生かし、保育園児に図画の指導をしており、昭和五十六年以来六年間、園児が出品する全国教育美術展幼児部門で連続地方学校賞などを受賞している。現在、保母、青年の間で同村の文化協会に美術部を新設する計画を進めている。

玉手箱の集い

富士吉田市下吉田に住むNHKドイツ語の講師のハンス・ギンター・クラウトランゲル氏を中心に、クラシック音楽、英語、ドイツ語などの語学、文芸、絵などを学び、かつ楽しむ玉手箱の集いが昭和六十一年九月から発足した。この仲間に鳴沢村で手作りのバイオリンを製作している藤野史郎さんほか十数人がこのサークルに参加している。

第三節 鳴沢村文化協会

鳴沢村文化協会の設立

鳴沢村文化協会が発足したのは昭和五十一年四月十九日である。

文芸・趣味のグループの連合体として各市町村の教育委員会の外郭団体として文化協会が発足したのは昭和三十四年ごろからであるが、南北都留地区の各町村の文化協会の発足は昭和四十年代から五十年代前期である。

鳴沢村の文化協会発足は他町村に比べて大きく溝をあけられた感があるが、村教委の積極的な指導と住民の熱意で

結成の運びになった。

同協会結成に先立ち、参加する部門別の代表が幾度か会合を開き、完成したばかりの総合センターを拠点にした文化活動の具体案を持ち寄って協議、協会の規約、各部門の設定、運営方法、役員人事などを検討し、創立総会で次の規約を制定した。

鳴沢村文化協会規約

第一条 本会は鳴沢村文化協会と称し、事務局を鳴沢村教育委員会に置く。

第二条 本会は鳴沢村に在住する十六歳以上の男女をもって構成する。但し小中学生は特別会員とする。

第三条 本会は情緒豊かな人間像の探求と文化団体相互の緊密な連絡協調により鳴沢村文化の健全な発展と向上をはかる事を目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

一、文化祭の開催

二、文化の啓蒙宣伝と文化活動の奨励

三、文化に関する展覧会、講演会、研究会、講習会等の開催

四、部活動の育成

五、その他本会の目的達成に必要な事業

第五条 本会に次の役員を置く。

会長 一名、顧問 若干名、副会長 二名、監事 二名、理事 各部の部長、幹事 一名

第六条 本会の役員の選出方法は次の通りとする。

- 一、会長、副会長、監事は理事会において選出し、総会で承認する
- 二、理事は各部の部長をもって構成する
- 三、顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する

四、幹事は会長が委嘱し理事会に報告する

第七条 本会の役員の内任期は二年とする。但し、再任を妨げない。補充役員の内任期は前任者の残任期間とする。

第八条 本会に次の部を置き、各部ごとに部長一名、副部長若干名を選出し、理事会の承認を得る。

園芸部、詩吟部、舞踊部、郷土史研究部、邦楽部、写真部、囲碁将棋部、神楽部、書道部、美術部、茶道部、華道部
(55年度からやすらぎ会、大正琴部が加入、59年度に民謡部、山草会加入)

第九条 本会の会議は、総会、役員会、理事会とする。

一、総会は年一回、会長が招集し、事業計画を決定。事業予算の承認、役員の内改選その他必要な事項を決定する。総会の議長は会長が行う事とする。

二、役員会は会長、副会長で構成し、必要な役員を加えて協議する。

三、理事会は必要に応じて会長が招集し、重要事項を協議する。

第十条 部会は各部の部長が適宜開催する。

第十一条 本会の経費は部会費、補助金、寄付金その他をもってこれにあてる。

第十二条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十三条 本会の規約は総会で改正、補足することが出来る。

付則

この規約は昭和五十一年四月十九日より施行する。

同協会に表彰規定

昭和五十九年十二月十七日、同協会は、あらたに文化協会表彰規定を設けて協会の趣旨に添って、功績のあつた役員、会員、本会事務職員のために次の表彰規定を制定した。

一、本会の会長、副会長を務め、その職を辞した者

二、本会の理事として四年以上在任し功績顕著な者

三、本会事務局職員として、五年以上在任し、功績顕著な者

四、その他本会の発展に寄与し、功績顕著な者

この規定は公布の日から施行する（昭和59年12月17日）

文化功労者

村に文化協会が設立されて十年の歳月が流れた。協会設立から運営の指導育成に努めた人たちを対象にした文化功労者の表彰が昭和五十五年度にかのぼって行われた。表彰された人たちは次の通りである。

渡辺清輝・渡辺静男・中村岩根・三浦保・伊賀明教・渡辺老男・清水澄・渡辺勝義・渡辺五十路・渡辺よう子・小林静作、小林ハナ子

同協会は、昭和五十九年六月六日、県立美術館で開かれた山梨県市町村文化協会連絡協議会（内藤成雄会長）の総会の席で同五十五年度から四か年間に鳴沢村文化協会の会長をつとめた渡辺勝義前会長に同連協会会長賞を贈呈した。

文化協会専門部会の活動

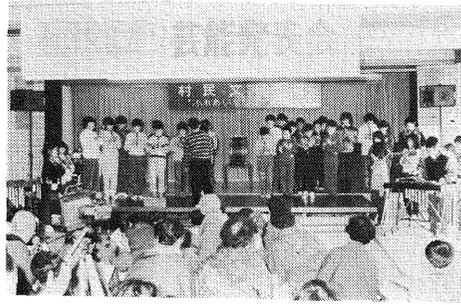
昭和五十一年四月、文化協会発足以来、各専門部会は、それぞれの独自の事業を立案して定期的に会合、練習を積み重ねて部門ごとの基盤を固めていった。その経過を専門部会ごとに紹介しよう。

〔郷土史研究部〕古代から現代まで鳴沢村の成立までの経過を一つひとつ解きほぐしていく郷土史の立体的な研究を趣旨として、考古遺跡、中世、近世、現代にいたる文化遺産の発掘と再調査、特に風俗習慣、言語、伝承等の民俗資料の収集と記録保存に力を注ぐことになった。その最終目標は、村営の「歴史資料館」（仮称）の設立を目指している。

郷土史研究部員は、小林一吉・渡辺長、渡辺駒男・渡辺芳明、小林昭輪・清水澄の各氏である。

〔神楽部〕火と山を神とした古代信仰から偶像崇拜の祭りのなかに神楽舞がある。大田和八幡神社に古くから伝わる神楽保存会の人たちで構成している。

毎年四月二十五日の春の祭例に太々神楽を奉納するなかで後継者の育成、郷土芸能祭への参加公演、民俗芸能の保存と再現に努めている。



村民文化祭りの芸能発表会

同八幡神社の神楽保存会が発足したのは昭和五十六年四月。その翌年三月に同村文化協会に参加した。毎週土曜日の夜を練習日としてけいこしている。

〔邦楽部〕他町村でも三味線、尺八を主体とする邦楽部は珍しい。渡辺岩根、渡辺清輝、渡辺太狼といったその道に熟達したリーダーを仰ぎ日本伝統の三弦と尺八を研究する人たちが集まってけいこに励んでいる。

結成当時は、二十人を超えた会員も、今は数人に減った。それだけ三味線や尺八はむずかしい。年一回の文化祭公演のほかボランティア活動の演奏を年三回から五回ほどしているが、マンネリ化を乗り越えるため、邦楽器と洋楽器の合同演奏会が開かれる日を夢に、新しい演奏計画を進めている。

〔舞踊部〕文協発足と同時に郷土に古くから伝わる民謡踊りの復活と共に、富士五湖舞踊連盟の東山流の東山乃代里会長らを講師に招いて新民謡の普及に努めている。

昭和五十五年五月、「鳴沢音頭」と「鳴沢慕情」のレコード化が実現し、その二曲の振り付けと踊りの指導に努めた。健康向上とストレス解消に参加しやすい部門とあって中・高年齢層の主婦が多く参加している。

〔民謡部〕文協参加は昭和五十九年十月からである。講師に安田幸吉先生を迎え、郷土民謡のほかに全国で有名な民謡を拾いあげて、その節回しや歌詞を勉強している。

婦人層を主力とする舞踊部とは対照的に男性の中・高年齢層が多い。部員は二十三人前後である。そのなかで壮年層（四十代）が七人も参加している。

〔武田節〕「縁古節」など郷土ものの民謡に加えて「黒田節」「おてもやん」などつぎつぎに全国の有名な民謡をマスタ―して文化祭、敬老会などに出演して発表した。

〔詩吟部〕文協発足と同時に加入した詩吟部。謙真会の渡辺督夫会長の指導で本格的な吟詠を始めた。はじめは志願者が多

かった。第一回の文化祭芸能発表の部でも四人の部員が初出場して独吟した。

肚はらから声を出すといわれている詩吟は、健康増進にも大いに役立つとあって長く続けている部員も少なくない。特に大田和地区には有段者も多数いる。

〔大正琴部〕渡辺あきのさんら、かつて大正琴を手がけた主婦たちの提唱で昭和五十一年に文協に加入した。

独特の音を奏でる大正琴は、文字通り大正時代にミニ琴として考案され、流行歌、演歌などを演奏する手軽な弦楽器として広く流行した。発足当時十二、三人が参加、渡辺あきの部長らの指導でかなり上達した。

〔やすらぎ会〕高齢者を対象にした教養、余暇利用の手作業といった分野を受け持つ趣味と奉仕の会。

歌、踊り、体操、ゲートボール、人形作り、神社の清掃、通学路の草刈り、保育所のモチつき大会に参加するなど幅広い活動を続けている。人生八十年の生涯教育の中で、語り伝えたいこと、伝統のそば、うどん作り、鳴沢菜の漬け方のコツ、針仕事、ワラ加工、竹細工などの伝承運動も、やすらぎ会の重点課題になっている。

〔園芸部〕昭和四十年に鳴沢盆栽生産組合が創立した。組合員三十人。富士山の特産のブナ、フジザクラなどの豊富な素材を利用して盆栽ブームが起き、これらの盆栽を販売ルートに乗せて現金収入の道をひらいた。こうした実践者がつどい合い、文協発足と同時に園芸部を創立した。

毎年一月の文化祭への出品をはじめ、緑化樹の栽培や整枝の技術講習会、文協後援の盆栽講習会を開き、五葉松の針金かけや整枝の指導を受けた。もともと、その道のベテランぞろいの部員である。毎年開かれる南都留特殊林産組合主催の盆栽品評会では、わが園芸部の部員のなかから林務部長賞、林務事務所長賞、特殊林産組合長賞などを受賞し、上位入賞している。

〔山草部〕昭和五十九年三月に文協に加入した。この年の五月三十日、富士北ろくの市町村を含めた「富士北麓山草会」が発足。

名誉会長、流石喜久巳、会長小林功、副会長、小林孝敏、石橋寛樹、理事十六人、会員百五人でスタートした。文協所属の山草部は、鳴沢支部を兼ねるかたちとなり、富士北ろくの山野草の研究と保護養成に努めている。

本会の小林副会長の提案で村役場の玄関口に、山草展示コーナーを設け、部員が交代で山野草を飾って村役場を訪ねてくる村民に観賞してもらっている。

〔囲碁・将棋部〕 囲碁、将棋のファン層は幅広い。小・中学生のなかでも大人顔負けの棋士がいる。文協発足と同時に三十人以上の部員が集まり、総合センターを会場にして囲碁、将棋のトーナメント試合が始まった。毎年一月の文化祭にも小学生、中学生、大人の三部門に分かれて大会が開かれ、各三位まで賞品を贈り、全員に参加賞が贈られている。

〔写真部〕 文協発足と同時に部活動に入り、ふるさとを題材にした風景、ポートレート、生活のひとコマなどを撮り続けている。

子供の成長記録、結婚式、成人式、祭りなど豊富な被写体に独自のアイデアを駆使して年ごとに、充実した内容の作品が多くなっている。

身をさすような厳寒の真夜中、三ツ峠で、撮影にすべてを賭けている部員もいる。

〔その他〕 協会発足当時は書道部、茶道部、美術部、華道部があり活動していたが、いまは定期的な部活動はしていない。文化祭のため個人的な研究による出品に終わっているが、同文化協会では、これらの低迷している専門部の活性化を図りながら、新たに俳句、短歌、川柳などの短詩型文芸の専門部を設けたい意向で、中心となる人たちと話し合っている。

文化協会歴代正副会長

昭和五十一年度 会長・渡辺清輝 副会長・渡辺静男

昭和五十二年度 前年度と同じ

昭和五十三年度 前年度と同じ

昭和五十四年度 前年度と同じ

昭和五十五年度 会長・渡辺勝美 副会長・渡辺昭秀

昭和五十六年度 前年度と同じ

昭和五十七年度 前年度と同じ

昭和五十八年度 前年度と同じ

昭和五十九年度 前年度と同じ

昭和六十年 前年度と同じ

昭和六十一年度 会長・小林一吉 副会長・渡辺長・渡辺昭秀

『十年の歩み』を発行

鳴沢村文化協会設立十周年を迎えた昭和六十一年三月三十一日、記念誌『十年の歩み』を発行した。A5判六十五ページの同誌は、編集委員の小林一吉委員長以下九人のスタッフで取材、原稿依頼、写真収集に努め、各専門部会の十年間の記録をまとめた。

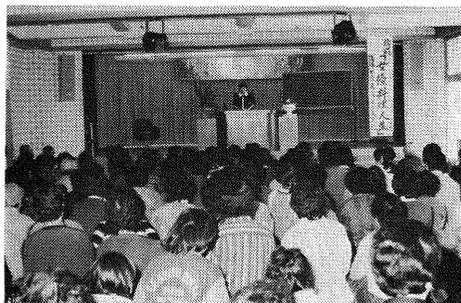
表紙の「笠雲富士」のカラー写真は、伊賀上明教氏が撮影。小林美知村長が題字を寄せている。

まず、創立十周年に寄せて小林一吉文化協会会長、渡辺長同副会長、小林美知村長、小林孝重教育長に富士五湖舞踊連盟の東山乃代里会長が祝いのことばを寄稿。各専門部の経過と実績を写真入りで報告している。

このほか「資料編」として文化祭記念講演一覧、県表彰および村の文化功勞者、文化祭の優秀作品、思い出のアルバム、役員、規約などを収録している。

記念講演会

昭和五十二年から毎年一月の文化祭に著名な講師を招き、総合センターで記念講演会を開いている。同誌によると、毎年、次のテーマで各講師の講演を聴いている。



女優大山のぶ代の記念講演会

- 昭和五十二年一月十七日(日)、「生きる才能」評論家 俵萌子
同五十三年一月十六日(土)、「親と子をむすぶもの」作家 田中澄江
同五十四年一月二十一日(日)、「流れる星は生きている」作家 藤原てい
同五十五年一月二十日(日)、「生活の中の慈悲心」宗教家 松原哲明
同五十六年一月十八日(日)、「ふるさとよさ」放送評論家 青木一雄
同五十七年一月十七日(日)、「このごろ思うこと」評論家 秋山ちえ子
同五十八年一月十六日(日)、「このごろ思うこと」甲府市すみれ保育園長 清水慶子
同五十九年二月十八日、大雪のため中止
同六十年一月二十六日(日)、「舞踊と講演でつづるふるさと歴史」作詞家 沢登初義
同六十一年一月二十六日(日)、「女優・料理・人生」女優 大山のぶ代

(坂本徳一)